

OVERWATCH 2

ヒーローたちの夜明け

過去の亡霊



MOHALE MASHIGO 著

ストーリー
MOHALE MASHIGO

アート
BORG SINABAN

編集
CHLOE FRABONI

制作
BRIANNE MESSINA, AMBER PROUE-THIBODEAU

デザイン
JESSICA RODRIGUEZ

ストーリー監修
MADI BUCKINGHAM, IAN LANDA-BEAVERS

ゲームチーム監修
*JEFF CHAMBERLAIN, GAVIN JURGENS-FYHRIE,
PETER C. LEE, MIRANDA MOYER, DION ROGERS*

スペシャルサンクス
IAN LANDA-BEAVERS, MADDIY COOK

日本語翻訳
GEORGE INAGAKI





赤ロスクリーンに映る十四歳のファリーハは、憤慨した様子で腕を組み、そっぽを向いていた。娘との数週間ぶりの会話だというのに、早くも険悪な空気が漂っている。

「ファリーハ、そなたのためを思って言っているのだ」

ファリーハは目を合わさない。「絶対にやりたいんです。自分の人生は自分で決めます」

「そなたはまだ若い。やりたいことなど、これからいくらでも見つかる」溜め息をつくアナ。「なぜそうもオーバーウォッチに入りたがる？」

ファリーハが理由を語るも、アナは聞いていなかった。娘にはもっとまともな人生を歩んでほしいという思いが彼女の頭を占めていたからだ。だが、もしアナが話を聞いていれば、せめてその必死な声に注意を払ってれば、あるいは気づけていたかもしれない——ファリーハの声に秘められた、つながりを求める切なる願いに。

「クライシスは終わった」アナが話を遮る。「もう戦う必要などないのだ。そなたは何にでもなれる……そのために私はこの身を捧げてきた」

するとファリーハが声を荒らげ、口論はなおも続いた。それから二か月間、二人は口を利かなかつた。そして、アナが娘の夢の話をそれ以上聞くことはなかった。

ライフルのスコープを覗き込むアナ。その先にはヌルセクターの戦闘用ロボットに囲まれている女性がいた。ほつれた赤い髪と紺色のスーツが、仕事に襲撃を受けたことを物語っている。侵略や戦争、あらゆる種類の暴力は、人々の生活を容赦なく切り裂き、虐げられた者の都合など顧みない。思考が駆け巡る。あの赤毛の女性はどれほどの間逃げ続け、避難場所を探していたのだろうか？ 家族と

“ためらうな、目をそらすな”——まるで生まれた時から身に染みついている戦場の掟。

離ればなれになってしまったのだろうか。ペットを家に残し、普段と変わらぬ一日を過ごすつもりで仕事に向かったのだろうか。あるいはすでに、家や家族を失ってしまったのだろうか。

ジャックの決断のもと、二人は半壊した建物から建物へと物陰を縫って移動していた。五階の窓から赤毛の女性が見えたのは、ビルの一つを出ようとした時だ。裸足のまま、両手を挙げて降伏の意を示す女性。アナにとってあまりにも見慣れた光景だった。

——いつか平和が訪れることはあるのだろうか？そんな疑問を胸に抱えながら、アナは砕けたガラスの上に屈み、外の戦闘ロボットを排除した。銃声が響いた瞬間、脅威から解放された赤毛の女性が叫び声を上げて逃げていく。それは、かつて戦地で初めて聞いた時にアナから眠りを奪ったのと同じ、恐怖に満ちた本能からの悲鳴だった。

“ためらうな、目をそらすな”——まるで生まれた時から身に染みついている戦場の掟。赤毛の女性がビルの間に消えるまで、その姿をじっと見つめていたアナの肩にジャックが手を置いた。

「彼女は大丈夫だ。行くぞ」

ジャックが赤毛の女性のことを言っているのはわかっていた。しかし、アナの脳裏に浮かんだのはファミリーだった。カイロで短い再会を果たしてから、彼女は娘の無事が気になって仕方がなかった。

そこに一筋の希望の光が差し込んだ。廃墟となった飲食店を通り抜けていると、照明が明滅し、いくつかの部屋にまだ煙が立ちこめているのが見えた。アナは追手の警戒に集中しており、店内にもジャックにも注意を払っていなかった。“全力で部隊を守れ”。これもまた、昔から心に刻まれている掟だった。

「おい、見てみる」ジャックの低い声に導かれ、アナは壁に空いた大きな穴をくぐる。

そこは店の厨房だった。その様子から、朝食メニューの準備が暴力的に邪魔されたことがわかる。パックからこぼれ落ち、割れて中身が出た状態で干からびている卵。妙に丈夫なヘラが綺麗に収まっているフライパン。テーブルや台の周辺には割れた食器が散乱していた。カウンターの上ではホログラムのニュースが流れている。どうやら釜山の、それも少し前、攻撃が始まった当初の映像のようだ。韓国語の放送の中に“オーバーウォッチ”という単語がはっきりと聞いて取れた。

——フツ。キャストィの見慣れた帽子が映ったのを見て、アナは思わず笑みを漏らした。——引き継いでくれたか、コール。キャストィと新たなエージェントたちは、韓国軍と連携してヌルセクターの部隊と戦っていた。ドローンの映像が揺れて途切れる寸前、画面の左端にロケット・ランチャーを持った女性が映った。

くだらない物語の序章のようだ。亡霊が二人、かつて住んでいた町に戻ってくる。一人はそこで死んですらいる。アナは大したユーモアのセンスの持ち主ではなかったが、過去を追う亡霊とは、まるでブラックジョークかのように思えた。

—ファリーハ!

「あいつは大丈夫だ。よくやったな」ジャックはそう言って、アナの肩に手を置いた。光明の見えない日々の中、ほとんど笑うことのなかった彼の顔に浮かんだ心からの笑み。ジャックはアナの心情を深く理解していた。仲間に加わる娘の姿を、彼女はもう一度見たいと思った。

—仲間。かつて同じ部隊に所属していたアナとジャックにも仲間がいた。互いに信頼し合い、心一つにしなげながら行動を共にする相手。それはあたかも、エジプトに伝わるタフティープの踊りと、その踊りから生まれた棒術のようで。—ウinstonはこの手の感傷的な戯言が好きだったな。

しかし、胸に去来する郷愁を遮るものがあつた。それは後悔。アナとジャックの任務を英雄視する者もいたが、アナにとってはそうではなかった。彼女はかつて大尉を務め、ジャックはオーバーウォッチのストライク・コマンダーだった。いつしか象徴的な存在となつた彼らは、新兵募集のポスターや子供向けのアニメに登場し、オーバーウォッチに救われた人々から数え切れないほどの手紙を受け取つた。オムニック・クライシスでは人類を救い、その使命のために身を捧げた……しかし、それだけでは足りなかつたのだ。世界は今も壊れたままで、ヒーローを求めている。彼らの築き上げたすべてが崩れ去つたのは、彼ら自身が招いたものか、それともタロンや他の誰かの手によるものか。

今は行けるところで戦い、やれるだけのことはやっているが、それは善意からくるものではない。ジャックを突き動かしているのは復讐心であり、アナを動かしているのは旧友への憐憫だ。オーバーウォッチを崩壊せしめた元凶は誰なのか、あるいは何なのか、その真実に近づきつつあるとジャックは感じており、アナはその歩みを支えていた。彼によると、今回の新たな情報提供者は有力な情報を持っており、それを証明するためにある重要な情報を提供するという。二人が長い間訪れることになつたチューリッヒに再び足を踏み入れたのはそれが理由だった。

くだらない物語の序章のようだ。亡霊が二人、かつて住んでいた町に戻ってくる。一人はそこで死んですらいる。アナは大したユーモアのセンスの持ち主ではなかったが、過去を追う亡霊とは、まる

でブラックジョークかのように思えた。かつて長い間仕事をしていたとはいえ、アナはチューリッヒを故郷だと思ったことはない。彼女にとっての故郷は常にカイロだった。母親、ファリーハ、そしてサムがいた頃は彼も帰りを待っていてくれた。そう、彼女はいつだって家に帰ってきた……。あの日、自らの掟を破り、“ためらう”までは。ポーランドでタロンのスナイパーに——かつて何度も助け、信頼していた相手であるアメリに撃たれるまでは。銃弾は命中し、アナは何年もの間他人の名前で昏睡状態に陥っていた。戦死とみなされた彼女は、名誉あるヒーローのまま死んだ。オーバーウォッチの凋落を目にせずにはすんだのだ。

だが、ジャックは違う。彼は最後の瞬間までその場にいた。ガブリエル・アダウエの抱いた国際治安維持部隊の夢がスイスのオーバーウォッチ本部と共に崩れ去ったその時も、彼はそこにいた。

“過去の亡霊”——ジャックは自分たちを指してそう呼んだ。もちろん、今はもう完全な亡霊ではない。コールとファリーハ、そしてレイエスはアナが活着していることを知っている。——タロンも気づいているはずだ。そう考えれば、カイロ、イスタンブール、ブダペストと私たちを追ってきたのも納得がいく。

ジャックとアナはしばらく黙ったまま歩き、やがてアナが問いかけた。それは本来ならすでに答えが得られているべき質問だったが、いかんせん彼は筋金入りの頑固者だ。

「今夜は何をするつもりなのだ？」そう言って、彼女は息を呑んだ。ジャックの表情から、芳しくない状況に飛び込もうとしていることが読み取れたからだ。

「情報によれば、タロンが狙っている者がいる」

辺りが暗くなりつつある中、アナは目を細めて彼を見た。「誰のことだ？」

「わからん。だが、時間と場所はじきにわかる」

「ジャック」アナが立ち止まると、ジャックは数歩進んで振り返った。頑固者は彼女も同じだ。「計画を教えてくれないことには協力のしようがない。私はそなたの味方なのだぞ」

ジャックの抱えている怒りと痛み。時折それは、癒やすにはあまりに深すぎるように思えた。彼が無事に目的に専念できるよう、アナはその背後に控える。それは彼女の深い情誼——戦友として重ねた年月を、より良い世界を築くために互いが捧げた犠牲を、そしてオーバーウォッチが二人にとって喜びと安らぎの場所であったことを、彼女は知っていたからだ。キャスディの悪ふざけ、ミレンベのベビーシャワー、シングの母親の手料理、ヴィヴィアンの真顔で言う冗談……。皆と過ごしたそこには、信頼と連帯、理解があった。オーバーウォッチを——かつての、“自分たちの”オーバーウォッチを崩壊させたものは何であったのか、ジャックはその原因を突き止める決意を固めていた。しかし、どれだけ優れた兵士であっても、怒りは足元を危うくするものである。

「名前は聞いていない。情報を置いたから探せとのことだ」続きを話そうとした彼の口にアナが手を当てた。

「つまり、我らは飛んで火にいる夏の虫か」バス停だった場所に腰を下ろしてアナは続ける。「行き先を聞くまではどこにも行かない」ジャックの目に悪戯心の色が宿った。もし拳の痛みがなければ

「しっかりしろ、 ジャック」声をかけつつ出血源を探る。 「墓場は死ぬところではないぞ」

ば、アナは笑ってジャックの腕を小突いていただろう。

「おい、アナ。いつからそんな悲観主義になった？」

「二十年前、ハイデラバードでそなたにひどい味のケバブを食わされた時からだ」

わずかな笑みを漏らすジャック。

「今回の情報は軽々しく扱うわけにはいかない。オンラインで通信する危険を避けて、指定の地点で回収することになっている」

アナは両手で顔を覆った。「それで、どこだ？」

「お前の気に入らない場所さ」

彼の言ったとおり、アナはその場所が気に入らなかった。ジャックが身を屈めて碑文を熱心に調べているその墓所には、皆の母にして姉妹、猫を愛したマリアと共に、情報提供者が隠したデータ・ドライヴが眠っているはずだった。

アナは別の霊廟の屋根に設置されたガーゴイル像にもたれかかり、スコープ越しにジャックを眺めていた。

若返ったかのように別の墓に走り寄る彼に照準を合わせながら、アナは思った。——おかしなものだ。何がそんなに楽しいというのか。おそらく正解の“マリア”を見つけたのだろう、石蓋をずらそうとしているジャックに向かって、道を下りてくるヌルセクターの部隊が見えた。本能が目覚め、アドレナリンが血液に流れ込む。アナは大きく深呼吸し、息を止めた。ジャックに接近していた戦闘ロボットを即座に排除、その隣で攻撃者を探すもう一体を片付ける。三体目に向けて引き金を引いたところで、四体目が彼女に向けて発砲した。

——チッ。屋根を滑り降りる彼女の耳に苦悶の叫びが届く。ジャックを見る。血を流し、墓碑の並ぶ壁に力なく寄りかかる彼がいた。不覚だ。

さらに二体の敵を倒し、物陰から出てジャックの元へと走る。ようやくたどり着くと、彼は息苦しそうに咳き込んでいた。

「しっかりしろ、ジャック」声をかけつつ出血源を探る。「墓場は死ぬところではないぞ」血に濡れた手を彼の口に当てると、鼓動が早鐘を打つ。胸から湧き出る血の泡。肺に当たったのだろうか。軍人として知っておくべき基本的な処置なら手慣れている。出血を止め、意識を保たせ、医療チームを待つ。そして可能なら負傷者を安全な場所へ移動させる。傷口にナノバイオティクスを打つと、ジャックは叫び声を上げた。彼は傷の手当てなど必要としたことがなかった。ガブリエルを除けば、アナが知る他の誰よりも傷の治りが早かったからだ。彼がいつも危険に飛び込むのは、すぐに回復することが自分でわかっていたからだろう。胸の傷口を見て、治癒するまでにどのくらいかかるだろうかと考えるアナ。ガーゼを押し当て、手を添えた。

永久に眠るマリアの隣、二人は黙ったまま座っていた。しばらくしてジャックの呼吸がようやく落ち着くと、アナはバックパックから魔法瓶を取り出し、隣の友人に手渡す。彼はそれを受け取ると、蓋を開けて匂いを嗅ぎ、中に入っていたお茶をゆっくりと飲んだ。必ず持っていくとアナが譲らなかったものだ。

「いい加減に教えろ。死にかけてまで手に入れようとした情報とはいったい何なのだ？」

「住所と時間だ」

「その情報は信用できるのか？」

「ここまで信用して動いてきた。今更引き返せん。それ以上言うな」

起き上がろうとするジャックに、アナは立ち上がりて手を貸す。まだ治りきっていない左胸を押さえる彼。アナは急ぐなと言いたかったが、代わりに一つの質問を口にした。「すべてが終わったらどうするつもりだ？」

「俺たちは兵士だ、アナ。戦いに終わりなどない」

暗号化されたビデオ通話を通して、七歳のファリーハは震える声で言った。「母上、こわいです。帰ってきてください」

それこそがアナの願いであり、今そこにいる理由でもあった。

数週間に及ぶ絶え間ないオムニックの攻撃の後、機械たちが再編成をしているかのような静かな夜があった。目を閉じれば、悪友たちとキャンプでもしているのだと思える、静かな夜。しかし、ガブリエル・レイエスは確信していた。ストライク・チームはアドレナリンに耐性ができているのだ。“静かな夜”は実際には少しも静かではなく、ある程度の戦闘には皆慣れてしまったのだ。

そうではないことを祈るとしよう——ラインハルトならそう答えるだろう。「我らがスナイパーにはアドレナリンが必要だからな」

アナはストールテック・テントの中にいた。ヨーテボリのエンジニアたちが夢見た、トールビヨーン
の新たな革新的発明品だ。この小型シェルターは携帯性に優れ、戦闘にも耐えうる耐久性を誇る。

通りかかるアナの足下でジャックが腕立て伏せをしていた——まだ始めたばかりだ。「腕立て五
百回を超えたぞとファリーハに言っといてくれ」

アナはおかしそうに笑った。「バカを言え、嘘つきめ」

むっつりと黙り込むファリーハを見て、アナはジャックの腕立ての話をした。「どうしてジャックは
いつも腕立てをしているのですか？」笑いをこらえながら尋ねるファリーハ。しかし、その表情は爆
発音がした瞬間に一変した。遠く、一キロ程度は離れているであろうその音。怪我や光は誤魔化せ
ても、戦闘音は容易に隠せなかった。「今の音は？」

「ただの爆発——」

「オムニック？オムニックが母上をやっつけに来たのですか？」

嘘をつくことはできた。だが、ファリーハはそれを見破っただろう。

そこにガブリエルが走り込んできた。「何人か連れて様子を見てくる。お前は待機しろ、すぐに戻
る。おそらくねぐらを失った残党だろう」

ファリーハは母親の顔をじっと見つめていた。「今のは？」

「ガブリエルだ。何も問題はない」

「どうしてわかるのですか？」この小さな娘は賢く、誰もが答えに窮する質問でいつも追い詰めて
くる。

「オムニックは、姿が見えるよりも前から音で知らせてくるのだ」恐怖は優れた戦術だ。恐怖は疑
念をもたらし、疑念は人間を容易な的に変える。アナが初陣に臨んだ最初の数夜、彼女は眠れなか
った。他の者がすぐに眠りにつくなかで、アナはどうにかして恐怖心を抑えなければならなかった。
そして、その方法が見つかるまでに二週間を要した。

「ファリーハ、二度目の爆発が聞こえたか？」

ファリーハは、ただ膝を抱えて画面をじっと見つめている。

「爆発の間隔が重要なのだ。オムニックの数、相手との距離がそこからわかる。少なくとも、私は
最近そうやって奴らの攻撃パターンを判断している」

「雷みたいに？」

やはり賢い子だった。

「そうだ」

ファリーハの肩から少し力が抜けたように見えた。しかしアナには、娘がまた別の質問を投げてこ
ようとしていることがわかった。

「私のところにもオムニックは来るでしょうか？」

その後どのようにして通話を終えたのか、アナは覚えていない。ただ、その時彼女は決めたのだ。
ファリーハに二度とそのような恐怖を抱かせはしないと。

娘が眠れなければ母もまた同じ。 平和な世界でファミリーハが安心して眠れる日が来るまで、アナに安眠が訪れることはない——

拠点を出てガブリエルの率いる夜襲部隊に参加したアナは彼を驚かせた。娘が眠れなければ母もまた同じ。平和な世界でファミリーハが安心して眠れる日が来るまで、アナに安眠が訪れることはない——

目的地に着いたのは、日が暮れてしばらくしてからだった。市街地からも墓地からも離れた、ヌルセクターの侵攻をまだ受けていない郊外の奥深く。住民には今も屋内への退避勧告が出ていた。——これは、一難去ってまた一難か。

アナが顔をしかめる。「良くないな。住宅地では一般市民が多すぎる。何か作戦はあるのか？」夜の作戦行動は彼女の得意とするところだったが、ジャックが何かを隠しているような予感が拭えなかった。アナは入念なブリーフィングを経てから行動に移ることを好んだ。しかし今回は、時間が無いと言うジャックに押され、補給も休息も、作戦を練ることもせずにここまで来ていた。

「いつもと同じだ。見晴らしの良い場所を探せ」と、ジャック。「俺は下を索敵してタロンどもを釣り出す。通信をつなげたまま援護してくれ」

「作戦と言うには足りないが、十分だ」アナは小さく答え、バッグを背負って素早く移動を始めた。

木々の茂る丘の斜面に沿って、小洒落たモダンな家が建っていた。——この家にはいったい誰が住んでいるというのだ？それはガラス張りの箱のようで、いくつかの部屋からは柔らかな明かりが漏れている。スナイパーだからだろうか、アナはそんな家に住みたいとは一切思わなかった。窓は敵を利するものでしかない、遠い昔に学んでいたからだ。

目的の家から四十メートルほど離れた廃屋に忍び込むアナ。そこなら身を隠しながら視界も確保できる。

「ガラスの家か。お前にとっては歯ごたえがないだろうが、俺が無茶をしたら真面目にやってくれよ」無線の向こうで笑うジャックの声を聞きながら、アナは階段を駆け上がる。

——息を整え、集中しろ。一日の内にヌルセクターの侵攻、墓地での奇襲、そしてタロンの襲撃だと？今も昔と何ら変わりはないということか。

ジャックが低く尋ねる。「アナ、位置に着いたか？何が見える？」

女性と子供。リビングルームのホロスクリンの前で親子がうたた寝をしていた。女性は子供を膝の上に抱いている。アナは息を止めた。——集中しろ。息を吐け。淡い暖色の光が寝室とキッチンから漏れている。アナの位置から見える他の二部屋は暗闇に包まれていた。

「ジャック、親子がいる」

「家のどこだ？もうすぐ着く」

「リビングだ」

アナが赤外線スコープを使おうとした時、タロンの刺客が庭で動くのが見えた。相手のレーザーサイトのおかげで位置が丸わかりだ。

——ためらうな。目をそらすな。アナは息を吐き、スコープで家の周囲を確認する。

「三時の方向、複数の敵兵が移動中。援護する。どうにかして中に入れ……迅速にな」

ジャックが移動する。しかし、敵の第二陣がすでに動き始めていた。

「その先に敵が複数。六人、十メートル先だ」

了解——返事の後に銃声が続く。

ジャックの撃った弾数を数えながら素早くスコープを動かし、キッチンの窓下で彼の姿を見つける。すると、その側頭部に光の点が浮かぶのが見えた。

「伏せろ！」

瞬間、身を屈めてプランターの裏に身を隠すジャック。彼の立っていた場所の数メートル後ろでタロン兵が崩れ落ちた。——役に立たないアーマーだ。

「速いな、アナ」

「そなたが遅いのだ。後ろは私に任せて、前を警戒しろ」

ガーデンソファの陰から躍り出る二つの人影。片方がジャックのほうに向かう。——まずい！

位置を知られたくはなかったが、他に選択肢はない。スタン弾を装填し、撃つ。敵の片方は倒れ、もう一人は狙撃のあった方向を見上げていた。——見つかった。移動しなければ。住人の女性に視線を戻すと、子供の姿はすでになく、彼女はキッチンで手に拳銃を持っていた。アナはもう一度引き金を引き、カウンターに置かれたワイングラスを撃ち抜く。ハッと振り向いてアナのいる方向を見上げる女性。ブロンドの髪に凜とした顔立ち——アナはまるでタイムスリップしたような感覚に陥った。

「ミレンベ？」知らず、声が漏れる。

——まさか！

アナの知っていた彼女よりも年を取っている。しかし、そのシルエット、銃の構え方、冷静な佇まい……彼女に違いなかった。

「ミレンベだ。ジャック、タロンが狙っているのはミレンベだ」

ジャックが息を呑むのがわかった。アナは新たな狙撃ポイントを目視で探す、適した場所がない。茂みからタロンの刺客たちが姿を現し、その内の二人が屋根から天窓を通過して家の中に侵入する。キッチンから二階に向かうミレンベ。アナは立ち上がり、ライフルを肩に担いだ。

「ざっと二十人ほどいるぞ」ジャックの声を聞きながら、アナは弾を込め直す。やるべきことは一つしかない——たとえ二人のルールに反していても。

「ジャック、そちらに行く。家の中に入る方法は見つけてある。敵を引きつけておいてくれ。中で合流だ！」

寝室のベランダへと登るアナの頭にあったのは、あの子供のことだ。おそらくはミレンベの子。刺客の一人がアナを見つけ、狙いを定めた。アナは自身を狙うレーザーポインター、次いで敵兵を見た。ライフルを片手で持ち、レーザーの発信源を真っ直ぐに見つめ、狙い、撃つ。ドサッと倒れる音を後ろに、彼女は寝室の窓ガラスを割った。

「生きてたなんて初耳なんだけど？」アナが部屋に足を踏み入れた途端、ミレンベから声をかけられた。見渡せば、空間が広がるようによく考えられて配置されたモダンで小綺麗な家具の数々。アナはミレンベが武器を隠しているであろう場所に見当を付けた。

「死んでいなくて悪かったな」そう言って子供の姿を探すアナ。「子供は無事か？」

ミレンベが頷く。「パニックルームにいる」彼女はアナに手で合図を送り、指を三本立て、バスルームのドアを指差した。アナはライフルを構え、左手のクローゼットを見た。

「家の中に入った」息を切らしたジャックの声がアナの耳に届く。「一階を確認中だ」階下から聞こえる銃声が、彼が手一杯であることを物語っている。

「来るぞ」ささやき、ライフルを構えるアナ。覚悟を決めるミレンベと共に、バスルームから飛び出した三人の刺客を迎え撃つ。——心を一つに。二人は遮蔽物を利用しながら機敏に動き、バスルームを制圧して廊下に出た。そこに複数の敵が階段を駆け上がってくる。

——集中しろ。ミレンベは、アナがポーランドで“死んだ”時に最後に会った人物の一人だ。——イスの右に三発。ミレンベの夫は当時ガンで死の床にあり、旧友が、かつての戦友たちが今どうしているのか、アナは度々気になっていた。キミコの真ん中の子は代数の試験に無事合格できたのか？シングの母親は今も固く香ばしいバカルカニを焼いているのだろうか？

ミレンベが肘でアナを小突き、やや危険な距離まで接近してきた敵を撃った。——息を整えろ。階段の敵を一掃して足早に階下へ降りると、手すりにジャックが寄りかかっていた。

ジャックからミレンベに視線を移すアナ。耳鳴りは止んでいた。静寂の中、三人は家の中の惨状を見渡す。「また引っ越さなきゃ」肩をすくめ、階段を上がるミレンベ。「すぐに戻るわ」

彼女は男の子を抱えて戻ってきた。恐竜のプリントされた毛布に包まれ、ホログラム・バイザーを被っている。歩いてくるミレンベは落ち着いた様子だったが、子供を強く抱きしめる指先に表れた緊張をアナは見逃さなかった。彼女が今腕の中に抱えている不安は、アナもよく知るものだ。ミレンベは子供を下ろし、そのバイザーを外した。

「クウェク、 今夜私たちを助けてくれた二人よ」

クウェクと呼ばれた小さな男の子
はジャックを見上げ、次にアナを見た。
そして少し何かを考え、こう尋ねた。
「この人たちがママの友達のヒーロー？」

「クウェク、今夜私たちを助けてくれた二人よ」

クウェクと呼ばれた小さな男の子はジャックを見上げ、次にアナを見た。そして少し何かを考え、
こう尋ねた。「この人たちがママの友達のヒーロー？」

「どうして母上がオーバーウォッチに行かないといけないのですか？何か困ってることがあるのですか？」六歳のファリーハが、自分の背丈ほどもある壁の上をつま先立ちで歩きながら、隣に付き添うアナに問いかけた。ファリーハはいつも何かを同時に行うのが好きだった。ガムを噛みながら走り、本を読みながら歌い、バレエのピルエットを練習しながら計算問題を解いていた少女は今、綱渡りの真似事をしながら母親に難しい質問を投げかけている。アナは娘の髪を結んでやりたかったが、遊びの邪魔をするつもりはなかった。

「いいや、仕事をしてくれと頼まれているのだ」「どんな仕事を？」ファリーハが再び問いかけ、バランスを崩して母の手を握る。

アナは握った手を離さない。「これさ」そして、その手に優しく力を入れた。「そなたが危ない目に遭わないよう、守る仕事だ」

「オムニックから？」

世界はそれほど単純ではない。戦争が終結するまでにどれほどの時間がかかる？そのためになんか予期せぬ危険が伴う？もし今起きている戦争を終結に導けたとしても、壊れた世界はそう簡単

に元には戻らない。やがて彼らは世界を守る使命を課せられるだろう。平和の守り手——それこそが、当時アナの知らなかったオーバーウォッチの前途だったのだから。

「そうだ。そのために母は遠くへ行かなければならない」

顔くファリーハ。この後答えにくい質問が飛んでくることをアナはわかっていた。

「危なくないのですか？」

それは今まで誰からも聞かれたことのない質問だった。サムでさえも口に出したことはない。危険なことは誰もが承知していたが、娘の口からその言葉を聞き、アナは歩みを止めた。

「危険だとしても、立ち向かわなければならない時があるのだ」

ファリーハが立ち止まり、壁から飛び降りた。

「じゃあ.....母上はヒーローになるのですね？」

“ヒーロー”という言葉にアナは意表を突かれた。彼女はエジプト最高のスナイパーであり、歴戦の兵士だ。すべては果たすべき務めに過ぎず、ヒーローなどという意識は少しもなかった。

当局へ通報したところ、現場の処理とミレンベに対する警護のための人員が送られてくることとなった。母親の背中で眠るクウェクとミレンベを安全な場所まで先導するジャック。時折暖かな風の吹く心地良い夜ではあったが、アナは自分の上着をクウェクにかけてやった。隣のブロックにある打ち捨てられたスーパーマーケットに身を落ち着けると、ミレンベはお茶でも飲んでゆっくり眠りたそうな顔をしていた。

「再招集を受けた日のことを思い出すわ」ミレンベが言った。「クウェクがゲームの画面を見せてきてね。ウィンストンのメッセージを見た私はそれどころじゃなかった」夜空を見つめる彼女。遠くにチューリッヒのあちこちで上がる火の手が見えた。「タロンがまだ私たちを狙ってるなんて。ヌルセクターのせいでこんな状況だっていうのに」

「結局何も変わっちゃいない」苦々しげに言い放つジャック。

かもね——そう言ってミレンベは続ける。「それを言えば、私だって変わらない。時々使命感に駆られるの。特に今は、息子のために少しでも安全な世界に」腕の中のクウェクを抱え直す彼女。

「だから狙われたのね、きっと。私がそう思うということは、他にもウィンストンの呼びかけに応えようとする人がいるはず」

「そなたはどうするのだ？」

肩をすくめるミレンベ。「この子の父親を亡くして.....色々難しいのよ。例の再招集から、監視委員会の目がますます厳しくなってる。キミコもそう言ってたし、ヴィヴィアンもだけど.....」

咳払いをするジャック。

「ヴィヴィアンはトロントを発ったそうだ」彼を無視してアナが言った。

「また近いうちに会えるわよね？」
ミレンベは何かを求めてアナを見た。
それは希望か、あるいは安堵か。
「もう勝手に死なないでよ。いい？」

「俺たちに言ってるのか？」
にやりと笑うジャック。「老兵の二人組だぞ。
そう簡単に死ぬものか」

ミレンベが微笑む。「ヴィヴィアンがまた戦場に戻ったのを見て、もしかしたら私もと思ったわ。これだけの事態だもの、私たちに對する制限だって緩和されるかも」そう言って溜め息をつく彼女。「そのうちまた皆でジブラルタルに戻るのかもね。釜山でのファリーハの映像を見たわよ。あなたきつと——」

その時、ミレンベの携帯電話が鳴った。

その画面をちらりと見るアナ。「そろそろか？」

「数ブロック先まで来てみたい。姿を消すなら今のうちよ。また近いうちに会えるわよね？」ミレンベは何かを求めてアナを見た。それは希望か、あるいは安堵か。「もう勝手に死なないでよ。いい？」

「俺たちに言ってるのか？」にやりと笑うジャック。「老兵の二人組だぞ。そう簡単に死ぬものか」

アナは別れの意を込めて、ミレンベの手をそっと握った。ジャックの使命と彼の情報提供者について話すつもりはなかった。説明するには事情があまりに込み入っていたからだ。優秀な諜報員であったミレンベは、限られた情報から状況を推察した——ジャックとアナはオーバーウォッチに復帰したに違いない。そうしてタロンの襲撃を察知し、自分を助けにきてくれたのだと。

「ウィンストンによろしく伝えておいて。それから——」ミレンベは少しためらってから続ける。「国連の監視を外してくれたら……ジブラルタルで懐かしい顔がたくさん見られるはずよ、って」

アナは微笑んだ。「では、露払いをしておこう」

ドアをそっと閉めて外へ出るアナ。ジャックの後に続いて再び闇の中へと進み、ふと立ち止まった。ジャックは何かを隠している——付き合いの長い彼女は確信していた。そして、二人は黙ったまましばらく歩く。誰にも声が聞こえない場所まで来るとアナは口を開いた。

「ジャック、そろそろ白状しろ。まだ何かあるのだろうか？」

話すべきか否か、彼は葛藤しているように見えた。

「私を愚かな殺し屋か何かと同じにしないでもらおうか。付き合いが長すぎるのだよ、私たちは」

ジャックがポケットから何かを取り出した。データ・ドライブだ。

——嫌な予感がする。

「情報提供者が渡してきたものは住所だけじゃない。このドライブを使えば、バックドアを通じてタロンの内部ファイルにアクセスできる。作戦計画書、実行日、ターゲットのリスト……だが、情報の真偽を確かめる必要があった。日付順に並んだリストの一番上にあった名前がミレンベだ……情報は正しい」

話している間、ジャックはアナを見なかった。

「ウォッチポイント・ジブラルタルへの侵入があってから……タロンはオーバーウォッチの元エージェントの居場所をほぼ完全に把握している。この二年間、奴らは暗殺を繰り返してきた」

アナは口の中に苦いものを感じた。その噂は聞いている——カイロでキャスディと会った時、自身で口にしたことだ。

「これはもっと情報を得るための手がかりだ。こいつを渡してきた奴はタロンが何を企んでいるのかを知っている」

次の瞬間、アナは口を突いて出た言葉が自分のものではなく、どこか遠くから聞こえてきたような気がした。「……ふざけるな」

ジャックは足を止めて振り返った。「アナ？」

「ジャック……我らの仲間なのだぞ。この数年、苦しみ、襲われ、殺されているのは」彼の顔をじっと見据えながらアナは続ける。「そのリストの次に書かれているのは誰だ？ウィンストンに知らせてやれ。あやつの……新たな仲間たちがきっと力を貸してくれる」

聞き終わる前から首を振るジャック。「大きな作戦を実行する時は慎重にならなければならない。情報提供者は——」

「今夜、我々がいなかったらどうなっていた？あの家に三十八人もの兵が送り込まれていた。生きてはいなかったはずだ。ミレンベも、子供も——」アナは首元から顔が熱くなるのを感じ、言葉を切った。

ジャックは何も言わない。

「それを寄越せ」素直に従った彼からジャックからデータ・ドライブを受け取り、データをダウンロードするアナ。画面にリストが表示される。いくつもの見知った顔と名前に赤色のバツが引かれて

**「ジャック……もう大勢失っているではないか。
それも……私が守ると誓った者たちを」**

**彼女はデータ・ドライブを突き返し、
大きく息を吐いた。「我らは生きている。
亡霊ではないのだぞ、ジャック」**

いるのを見て、アナは全身の血が凍るような感覚に襲われた。

「ジャック……もう大勢失っているではないか。それも……私が守ると誓った者たちを」

彼女はデータ・ドライブを突き返し、大きく息を吐いた。「我らは生きている。亡霊ではないのだぞ、ジャック。なぜそなたは過去にこだわる？」

彼の眼差しはここではないどこかを見ていたが、ほんの一時だけこの場に戻り、アナに視線を合わせた。「お前はいつも、より良い世界を目指していたな。サムのため、ファリーハのため……誰かのために力を尽くしていた。だが、俺は——」何かに思いを馳せるように言葉を止めるジャック。「俺にとっては、過去がすべてだ」

「気をつけて行け、ジャック」言いたいことはいくらでもあった。だが、彼なら言わなくても伝わっているとアナは信じていた。

「俺は俺のやり方で大切な者たちを助ける。このリストを作った奴を……オーバーウォッチを終わらせた奴を見つけるまで、止まる気はない」

アナの胸に悲しみが込み上げる。これまで困難な任務で行動を別にすることがあっても、必ず再会できると信じていた。しかし、今回はかつてほどの確信が持てず、彼もまたそれを理解していた。もはや二人は同じ戦いに身を置いてはいなかった。

「くれぐれも無理はしないでくれ」

ジャックはただ頷いた。

彼が夜の闇へと消えていくのを、アナはじっと見つめていた。

「さらばだ、旧き友よ」アナは気づいた。ファリーハのために世界を救った、と言った自分は間違っていた。世界は常に救いを求めている。オーバーウォッチ最大の幻想がそれだ——完全な平和など

ありはしない。常に秩序を脅かす者たちがおり、善良な人々を利用しようとする者が絶えることは決してないのだ。

ファリーハは幼い頃からその現実を目にしてきた。そして今、ファリーハは人々が——アナが頼りにするヒーローだ。そこにいたはずの自分自身に絶望し、暗闇の中で一人立ち尽くす中、地平線の彼方に灯った光。その瞬間、彼女は娘を近くに感じた。二人が共有する、平和と愛する人々を守るという使命。たとえ隣にいらなくても、遠く離れていたとしても、アナは使命を果たすだろう。リストに名を書かれた者たちを見つけ出し、守るだろう。それが、この黄昏の世界でせめて彼女が正すことのできる過ちの一つなのだから。